

父の写真  
小嶋祥三

手元に父が長野県の小布施の高等小学校を卒業した時の記念写真がある。大正 7 年度、1919 年のことだ。この写真は父が亡くなった後に初めて目にしたものだ。下にあるように大勢の卒業生が写っているの、どの子が父だか分からない。長兄、次兄とわたしで、どれが父か推定してみた。次兄とわたしは同じ子供を指さしたが、長兄は別の子供を指さした。父は色黒だったので、次兄とわたしはそれを手掛かりにしたようだった。長兄が指さした子は色白だった。このときは決め手がなく、話はそこで終わった。



戦前の学制は複雑で分かりにくい。高等小学校は 2 年制だったようだ。現在の学制では中学 2 年生の歳で卒業だ。父は援助してくれる人に恵まれて、新設だった東京の旧制五中に進むことができた。父はストレートに中学に来た生徒よりは 2 歳年上だったろう。この年齢での 2 歳の差は大きい。そんなこともあっただろうか、父は奮起して 5 年の中学を 4 年で終え、旧制二高（仙台）へ進学した。

左の写真は二高時代の父である。この写真で気が付いたが、父は特徴のある耳をしていた。上方にとがっており、耳朶は丸くならず、下へのびていた。最近、この特徴を手掛かりに改めて卒業写真を眺めなおした。

以前、次兄とわたしが指さした子の耳は上にとがっておらず、耳朶は丸まっており、明らかに父でないことが分かった。耳の形を手掛かりに一人ひとり当たっていった。そしてこれが父ではないかと思われる子供がいた。最上段の中央、先生？の横でやや右方向を向いている生徒だ。色も黒い。その写真を下に載せるが、どうだろうか。

